

B 型	854	23%
O 型	1,046	28%
AB 型	417	11%

b 表判定と裏判定の異なるもの

表判定	裏判定	件数
A 型	O 型	3 件
B 型	O 型	1 件
O 型	A 型	2 件
AB 型	O 型	1 件
AB 型	B 型	3 件

尚 O 型血球に対する凝集の有無をも併せて検査を実施しているが、全例中 28 件の検体に凝集を見出した。これらは使用不能である事は勿論である。

2. Rh 式血液型について

Rh 式血液型を判定するのに当科では、動物免疫抗口血清の市販のものを用いて実施しているが、判定上疑ある検体を発見したときは更に又由来の抗口診断血清を 2 種（製造者が異なる）を用いて再確認している。上

記期間中に Rh (一) の 8 例を判定した。

3. 梅毒検査について

献血中に梅毒血清学的反応陽性の有無を確認するために補体結合反応、凝集法及びガラス板法を同時に行っているが全例中 16 件の陽性血清があったが、その内訳は次の通りである。

イ. 三法とも陽性を示したもの	12 件
ロ. 補体結合反応が陽性 凝集法, ガラス板法陰性	3 件
ハ. 三法中ガラス板法のみ陰性	1 件

以上の成績を一括すると、次の表の通りである。

	ABO 型	Rh 陰性	表判定と裏の不一致	O 型血球に凝集するもの	梅毒
A 型	1,437	3	3	9	10
B 型	854	3	1	10	1
O 型	1,046	2	2	2	3
AB 型	417	0	4	7	2
合計	3,754	8	10	28	16

3. 山梨県内屠畜場豚の日本脳炎赤血球凝集抑制抗体価の消長について

小沢 尚夫 有泉 昇 雨宮 英子 窪田 知子

昭和 40 年 4 月より逐年、厚生省衛生局防疫課は、主要都道府県及び地方衛生研究所等の協力を得て、日本脳炎ウイルスの分離及び一連の血清学的検査を実施し、その結果を総合分析することにより日本脳炎の流行発生の可能性を予測し、その予防対策の重点を、知るを目的とする。即ち日本脳炎流行予測事業なるものを計画実施することになった。しかし本県はウイルス分離同定が出来ないのが理由とて、40 年度の該事業の委託から除外された。そこで県厚生労働部予防課は独自（予算的に）に該事業を計画し、当衛生研究所、県内保健所、畜産課、家畜保健衛生所等の協力を得て実施することになった。当衛生研では当然ながら屠畜場豚の血液につき日本脳炎赤血球凝集抑制試験（以下日脳 H I）を担当することになった。結果は毎回、直ちに県予防課へ報告した。県予防課も直ちに厚生省へ参考資料として進達した。但し結果の分析及び予測については県予防課が厚生省公衆衛生局防疫課、国立予防衛生研究所等の指導協力を得て行い、適宜、県内関係機関及び県民に通知し予防対策の資料に供した。

即ち検査時期は、昭和 40 年 6 月 7 日より 9 月 27 日まで毎週月曜日、それ以後は 10 月より翌年 2 月まで 1 回、

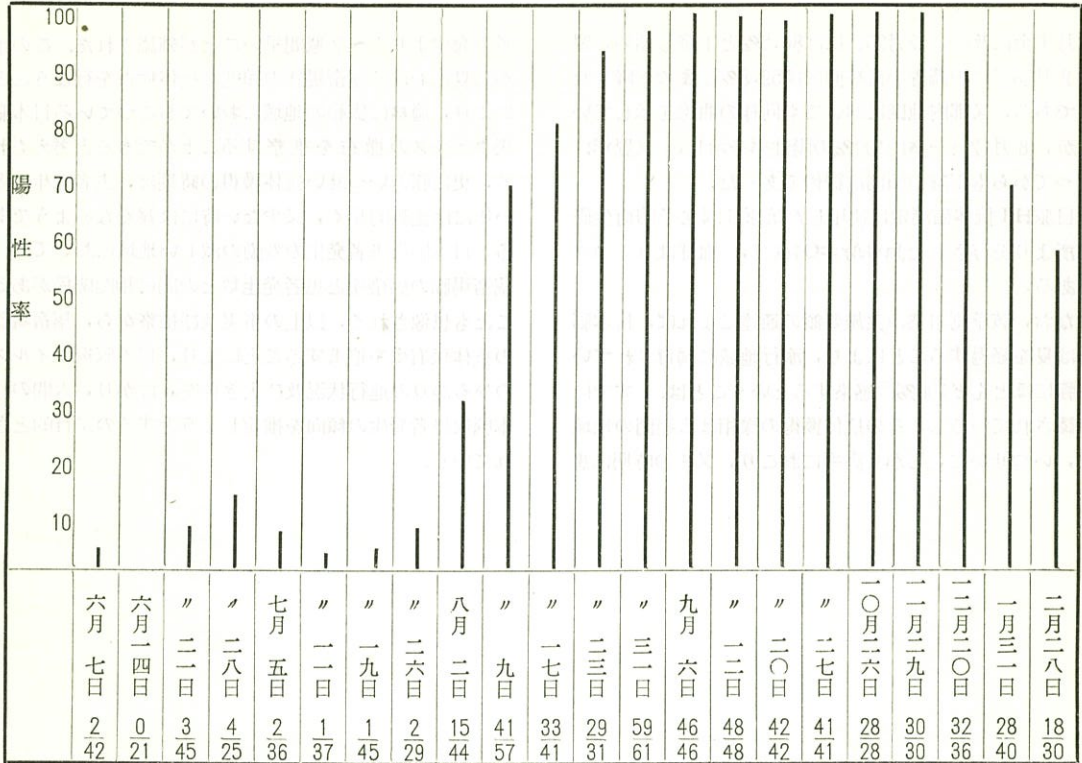
県予防課員並に吉田保健所係員が採取し、持参した屠畜場豚の血液につき日脳 H I 価を測定した。客体の選定は東八代郡石和町山梨果枝肉センター並に富士吉田市屠畜場に送られる県内産の豚を、産地を次の 4 地区に区分し 1 地区 1 回につき 10 頭宛を客体とした。客体となる豚は生後 5 ~ 8 ヶ月のものを対象とした。但し種、性の別は問わなかつた。すなわち、

- 北巨摩地区（北巨摩郡の町村、韮崎市を含む）
- 中巨摩地区（中巨摩郡の町村、甲府市を含む）
- 南巨摩、西八代地区（南巨摩郡及び西八代郡の町）
- 東山梨、東八代地区（東山梨郡、東八代郡の町村、山梨市、塩山市を含む）

等の 4 地区より毎回計 40 客体を選定採血し、持参されたものについて日脳 H I 抗体価を測定した。その成績は次の表 I、表 II のような抗体価の消長を示した。

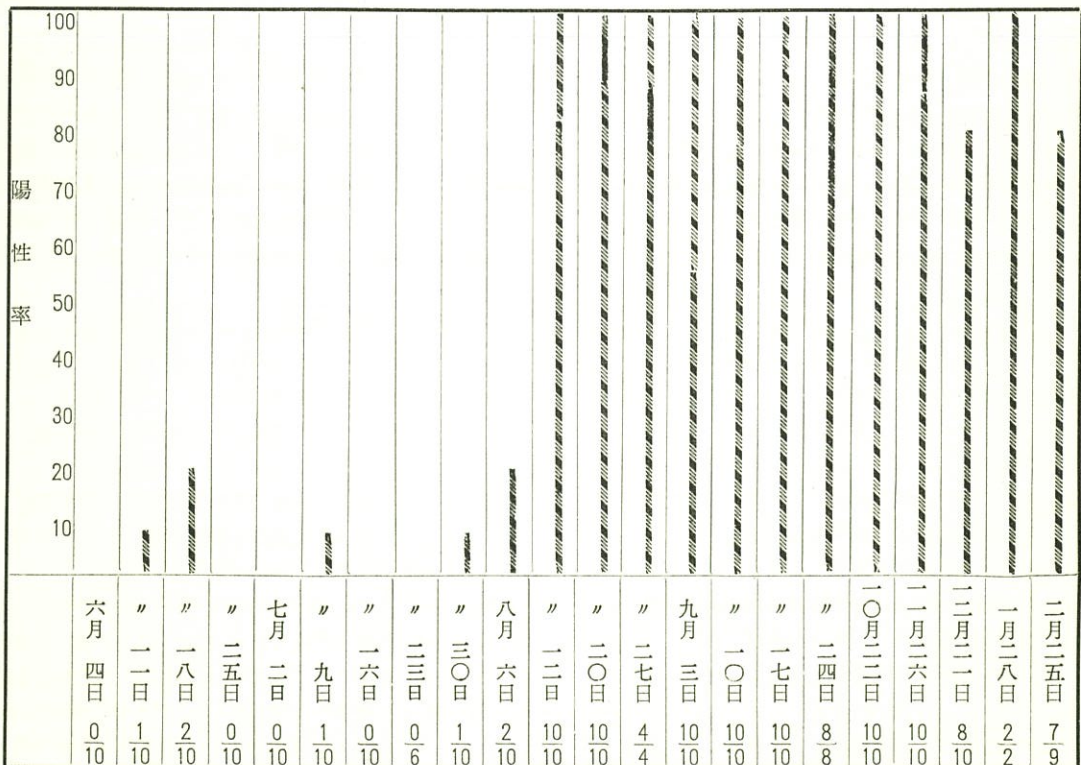
表に示すように、國中地区の客体については 6 月 28 日採取のものに 16% の陽性率を示し、以後 3 週間の下降を示し、4 週目から上昇の傾向を示し始め、遂に 9 月 6 日には 50 客体中抗体価 1,280 倍が 2 頭、他の 48 客体は 2,560 倍又は、それ以上の抗体価を示し、陽性率 100% に至ったのであるが、この状態は 11 月 29 日採取のものまで約 2

(表 I) 国中地区 Hi 抗体出現状況



※月日下の分数の分母は採血頭数、分子は陽性数を示す。

(表 II) 郡内地区 Hi 抗体出現状況



※月日下の分数の分母は採血豚頭数、分子は陽性豚頭数を示す。

ヶ月半余に及び、12月20日には86.5%と下降し始め、翌年2月28日この調査の最終回には59.8%にまで下降したのである。又郡内地区においても同様の曲線を示しているが、8月12日一挙に100%の陽性率を示し、又翌年に入ってから下降の傾向は緩慢であった。

日脳HI抗体価測定に使用した抗原は国立予防衛生研究所より分与されたJaGAγ#O1株で、血球はガチヨウである。

なお、該予測事業の実施要領の通達によれば、日本脳炎は夏を経過することにより、流行地域に飼育されている豚にほとんど100%、感染するということが、すでに確認されているし、その抗体獲得の様相は広範囲の地域で、いつせいに、しかも高率におこり、又その時期は患

者の発生より1～2週間早いことが確認された。このことから夏における屠畜場豚の頻度は抗体検査を行なうことにより、適格に広範の地域においておこっている日本脳炎ウイルスの撒布を推察することができると考えられる。更に豚のいつせい抗体獲得の時期は、患者発生の多い年には比較的早く、又少ない時には遅くなるようである。日本脳炎患者発生の変動の激しい地域においては、屠畜場豚の感染率と患者発生数との間に相関関係があることも想像される。以上の事実及び推察から、屠畜場豚の抗体保有率を追求することにより、日本脳炎ウイルスのひろがりの進行状況及び大きさを、はかり、人間の日本脳炎患者発生の傾向を推定しようとするのが目的とされている。